〝聞〟――佛説観無量寿経を読む――

大城邦義

〝聞〟―それは〝教えの前に立つ〟ということである。『佛説観無量寿経』には、その聞という一点が人間に成就していくことによって人間が本願の機と成っていく、すなわち本願における救済の自証が語られている。今、その自証者、すなわち「悟世非常」教えの前に自己を晒していかざるをえなかった実業の凡夫・韋提希がいかに変革されていったかを見てみたい。

善導が厭苦縁と押えたところから、韋提希が〝教え〟を求めていく姿が浮き彫りにされてくるのであるが、一子阿闍世に幽閉されて愁憂憔悴する只中から生れてくるのは「遙向耆闍崛山為佛作礼」という姿勢である。そしてそこから吐き出されてくるのは、

如来世尊在昔之時恆遣阿難来慰問我　我今愁憂、世尊威重無由得見、願遣目連尊者阿難与我相見

という言葉である。そこにあるのは、世尊に直接教えを求める心ではなく、自分と馴染みの深い佛弟子を求めていることである。韋提希は目連と阿難を求めているのである。目連は〝親〟族である。「目連在俗是王別親。既得出家即是門師」（禁父経）と善導は言う。阿難は「在昔之時恆」来りて慰問してくれていた佛弟子である。ともに昔からの馴染みの佛弟子なのである。「親」にたより、過去の慰問の事実にたより、更に慰問を求める、そこに〝教え〟からは遙かに遠い韋提希の姿が知らされる。愁憂憔悴の只中で人間が求めていく佛法への関わりは慰問なのである。そこには確かに藁をも摑むが如き、苦悩の只中で何かを求めていることはうかがえるが、実はその底には自ら〝教え〟を避けている自分が居るのである。それが「遙向」という姿の中にある質である。それは言わば世尊を求めながら世尊を避けているとも言うべき自己矛盾であり、自己欺瞞である。それが「遙向」という姿勢なのである。それは自己防衛本能とも言えよう。思う、人間はたとえ苦悩の只中に在って救いを求めていても、その心は〝佛〟に遇うことだけは避けているのではないか、と。何故なら人間はどこまでも自我心の充足を求めているからである。人間は佛の教えを求めてはいないのである。佛に遇わねば救われないことを知っていても、実は遇うことを恐れているのである。佛は自我心にとって不都合な存在だからである。自覚覚他覚行窮満して用く佛は人間の自我心を完膚なきまでに破砕するからである。慰問を求める自我心は遙向することしかできないのである。故に世尊に遙向して佛弟子を求めつつ悲泣雨涙して更に「遙向佛礼」ばかりなのである。故にその姿はついに「未挙頭頃」に収まっていくのである。すなわち頭を挙げることができないのである。それは心が閉塞されているということである。一見、頭を下げていて謙譲に見えて実は世尊に決して自分の心中を見せまいとする頑冥さである。「未挙頭頃」に集束されるところに、人間自身の内からは決して救いは開かれていかない、人間の窮極的姿がうかがえる。故に世尊はその救いなき人間の窮極的姿を知って、ついに自ら出現されるのである。

爾時世尊在耆闍崛山知韋提希心之所念即敕大目犍連及以阿難従空而来佛従耆闍崛山没於王宮出

世尊はまさに韋提希の上に時機純熟せるチャンスを見たのである。故に出現せずにおれなかったのである。それがまさに教えが開かれんとする出発点である。そして「時韋提希礼已挙レ頭見二世尊釈迦牟尼佛一」のである。自分が要請した佛弟子を見たのではなく、世尊を見たのである。まさに思いがけなくも世尊を見たが故にこそ、自分でも意識していなかった本音が迸り出るのである。それが「時韋提希見二佛世尊一自絶二瓔珞一挙レ身投レ地号泣向レ佛白言」と語り出される次の言葉である。

世尊、我宿何罪　生二此悪子一。世尊、復有二何等因縁一与二提婆達多一共為二眷属一

まさに韋提希は見佛において「向レ佛白言」存在に成ったのである。「遙向」の「遙」がとれ「向佛」となったとき初めて「世尊！」と直接呼びかけ、己れの本音を暴露するのである。直接「世尊！」と呼べる存在に成る、そこに救いの門は開かれたのである。「見佛」のもたらすもの、それは「自絶瓔珞挙身投地」であり、「号泣向佛白言」である。初めて佛に真に問うべきを問える存在に成ったのである。「自絶…号泣」のもとに自我心の覆いは崩壊し流され、自らの「宿業因縁」が問わしめられるのである。ここで大切な事は「自絶」ということである。宗教が人間の上に開示され、〝教え〟が道になっていくに当って、この「自絶」という自己決定が要なのである。世尊が何かの通力を使って絶ったのではなく、韋提希自ら絶ったのである。世尊はただ「知二韋提希心之所念一」黙って姿を現わしたのみである。世尊にあるのはただ沈黙である。それは「知二韋提希心之所念一」故にこそ黙って待っていたのである。「自絶」を待っていたのである。やはり「自絶」でなければならないことを痛感する。何故ならば、他者による他絶であったならば、たとえ世尊であろうとも、韋提希はかえって心を閉ざしていったであろうからである。

そのように、佛自らの出現により己れを暴露し「宿業因縁」を問いつつ又佛をなじりながらも、韋提希は初めて「唯願世尊…」と言って願を表白していくのである。まさに願が明かになっていくところに「見佛」の利益がある。「唯願世尊…」「願我未来…」「唯願佛曰…」「我今楽生…」「唯願世尊…」という展開に注意しなければならない。その韋提希の表白の中に「今向二世尊一」とあるように、ここで韋提希は自覚的に世尊に対向していくのである。その中から「唯願佛日教レ我観二於清浄業処一」と善導が「通請二去行一」「通請二得生之行一」と押えた「行」が求められてくるのである。思うに、宗教というのは本当に「行」が明かになればよいのである。穢土に迷える者は「行」を求めているのである。韋提希自身において「行」が求められていくところに「願」が具体的に自覚化されつつあることが知られる。それは更に光台現国をくぐって韋提希が更に「唯願世尊教二我思惟一教二我正受一」と「別行」が求められていくことに連なっていく。

そして、そのように韋提希が願生の行者と成っていくことにおいて、初めて世尊は微笑されるのである。それは、韋提希一人が真に佛弟子として生れ変ったことにおいてまさに世界が救われていくことが確認されたからである。佛出世の本懐は韋提希一人を願生者とし、佛弟子と成すことにおいて満足したのである。世尊の口より出た光によって幽閉の身の頻婆娑羅王が不還果を得たとあるのはその証明である。